

紫 煙

化学系 西 尾 建 彦

1月より環境研究科のメンバーに加えて頂きました。丁度、新年から学年末にかかる時期であり数回パーティに参加する機会があり、その時、所属する比較的小所帯の化学系などのパーティとは異なり'何か様子が違うなあ'と感ずることがありました。それは構成するメンバーの違いに依ることはもちろんのことながらパーティ会場に立ち昇る「紫煙」でした。以前はパーティ会場や会議の席では当り前の光景であったが、近年いろいろな意味で喫煙(禁煙)に関した事柄が様々な機会に取り上げられることが多く、最近ではこういった光景は珍しい。あるいは、環境研究科に所属することになって'環境'という文字の意味を見直しつつ眺めたせいかも知れないがちょっと違った雰囲気を感じた。私自身、以前煙草を吸っていたし、電車や飛行機では座席を確保し易いので好んで喫煙席に座ることが多い。

禁煙をして10数年になる。おそらく新幹線やレストラン等に禁煙席が設けられる前の頃で、嫌煙権なる言葉がまだ一人立ちする前ではないかと思う。別段やめる理由はなかったがそれまで20年ちかく喫煙、やめる直前は1日、およそ30本前後吸っていたのをある日なんとなく突然やめてしまった。30本前後というのはある意味では喫煙者にとって中途半端な本数である。煙草は1箱20本入りがほとんどなので買いだめしていれば別であるが、朝買えば夕方なくなる。夕方買えば昼ごろなくなるといったある周期を見れば規則的であるが1日を単位として見ると不規則である。従って、煙草がなくなると買いに行かなければならない。当時、大学では煙草の自動販売機は事務区の近くのみであり他の建物にいる人にとって甚だ不便であった。真夏の日中や冬の風の強い日とか、雨の日は面倒になり辛抱して昼食とき、あるいは帰宅途中に買えるようになるまで待つことになる。そうすると煙草がきれて買うまで落ち着かなくなるし、買った後は吸わなかった分を取り返そうとして余計本数が増える。また、貰い煙草という人に迷惑をかける行為にでることもある。ある時、なんとなく無駄で馬鹿馬鹿しい状況を繰り返しているなと思い、毎朝煙草を1箱買い、その本数(20本)を吸い終えると新たに買いに行かないことに決め節煙に心がけた。ところが毎朝どこかで通勤途中に煙草を買うため立ち寄らなければならないといった状況に陥った。電車やバス通勤であれば途中の駅の売店等で容易に買えることが出来るのだが、自動車通勤だとそれも面倒になりいつの間にかその買うという行為もやめるようになりそのまま吸わなくなって現在まで禁煙が続いている。巷ではいろいろ工夫、また苦心して禁煙にトライしている人々の話を聞きますが、ものぐさ禁煙法とも言うのでしょうか、無目的、かつ禁煙を一大決心しなかったのがなんとなく簡単に禁煙に至ったのではないかと思っている。但し、今後再び喫煙を再開するかも知れませんが・・・